

で、「俺死んだら家の奴、なんと言うべい」など、そんなこと考えたりね。そうしたら、もうすぐ日が暮れるなあと思った。「歩調取れ」なんて号令をかけ、ぞろぞろみなが来てくれた。そして、また船に乗せられ一週間ぐらいで広東へ着いたかね。

広東へ着いたら、負傷兵は手当してくれ、広東陸軍病院で私は一番先に降ろされ、一番奥の所に置かされた。だけど船降ろされるとき全部脱がされ、毛布一枚ですよ。色の白い衛生兵や慰問団とかがそのところを歩いているのですよ。

まもなく、広東から香港へ行ったけど、九竜へ転院です。見たら誰もいない、ここへ置かれるのかなと思っていたら、しばらくして衛生兵に「いたいた」と持っていたら、何せ毛布一枚、隠すものなしの素っ裸、褌と白衣を着せてもらって、三日ばかりしたら居留民の国防婦人会の人が慰問にくれた。前線から帰ってきたというので。

九竜から原隊に戻り海豊へ行ったら、部隊は米軍の上陸に備えるため洞窟で陣地構築中でした。隊では、私は

死んだことになっていました。ですから配属された百八連隊がどこにいたか分からなかったです。

帰りは、黄甫から浦賀へ着いたが、コレラで港に停泊して、昭和二十一年四月に復員しました。

帰ってみれば天涯孤独

福岡県 鬼塚 国 男

私は大正十年生まれで、兵隊検査では第二乙種で、昭和十七年二月一日に、臨時召集をされ、歩兵第十三連隊補充隊に入りました。二十三日に熊本陸軍病院に転属となり、一期の教育を受けたんです。

入隊する時の私は家庭は母と兄と兄嫁の四人で、父は私が生まれる一寸前亡くなっておりませう。兄は私と違って兵隊向きの男でして、現役で中支に行き一度家に帰ってきましたが、私の入隊後、再度召集で南方へ行き、戦後の二十一年の暮に、「フィリッピンで戦死」の公報がきました。階級は曹長でしたから、下士官候補志願では

なかったですか。

母は永い間、後家を通して育てた息子二人とも兵隊に取られ、無事の帰りを祈っていたようですが、息子の留守中の昭和十八年に病んで亡くなったことは、私が復員して知りました。

私は衛生兵の教育を受けたので、北支山西省運城の第三十七師団輜重兵第三十七連隊に二か年半、衛生兵として勤務しました。その間、師団司令部で軍医さんの手伝いをしたり、本部の衛生室で簡単な治療、手当をしていました。

十九年三月、独立工兵第四十連隊に転属となりましたが、部隊そのものが第一線ではありませんでしたので、衛生室の仕事も、病人や怪我人相手でした。終戦の頃は部隊が満州へ移動するため、行軍中の鄭州近くで終戦を知り、武装解除は天津でやられました。

第三十七師団は、十九年春早々、河南の作戦に参加し、夏には、湖南省の長沙、衡陽などの攻略の時は軍の右翼となり、桂林攻略や柳州攻略などの湘桂作戦で、大変な犠牲を出しています。昭和二十年には仏印に入り、タイ

国まで行軍と戦闘の連続だったのです。若し、本隊に居たら生きては帰れなかったかも知れませんでした。

佐世保に復員したのは、二十一年の二月の末でした。家に帰ってみたら母は亡くなっていたし、兄嫁は子供一人を連れて実家に帰って、家には誰も迎える人がいないのには、ガッカリしました。

兵隊の苦勞もさることながら家に帰ってからも大変でした。家は空家ですから仕方なく兄嫁の実家の世話になり仕事探しに半年位かかりました。

幸い入隊前の会社に何んとか復職できましたが、戦後は不況で会社も苦しく、石炭販売の仕事も無くなり、建築資材や燃料ガスの販売関係の仕事に変わり、定年まで勤め、一男三女にも恵まれ、子供達も自立することができて年金生活の毎日です。

母は私を産んで間もなく夫を亡くし、永いこと未亡人生活で非常に苦勞しながら、私たちを育ててくれました。前にも申したとおり、子供二人とも兵隊にとられ、淋しい思いをしていたと思います。

兄が再召集で、フィリッピンで戦死したのですが、母

はそれを知らずに、兄や私の帰りを待ちこがれつつ、昭和十八年に亡くなってしまったわけです。私も、母の恩に報いることも出来ず、看病すらもできず、母が亡くなったことさえ知らずに戦地勤務をしていたわけです。

私は今でも、母のことが常に思い出されるんですが、苦しみや淋しさを耐えて不幸な一生を終わった母が可愛そうでなりません。戦争が無かったら、母をいたわり、孝行も出来たでしょうし、母も、もっと長生きして余生を楽に暮らせることが出来たと、悔やまれてなりません。

若い憲兵の中国での終戦前後

岐阜県 岸 欣一

私は大正十四年二月生まれです。十三年生まれと一緒に徴兵検査（昭和十九年徴集者は十三、十四年生まれ二か年分で、現役兵約一四〇万人が検査を受け、一〇〇万人近くが現役として入営した）で甲種合格、十九年十二

月五日に岐阜の歩兵六十八連隊留守隊に入営しました。

十二月十五日、警兵团（独立歩兵第六旅団）に転属し、下関から船で釜山へ、朝鮮半島―山海関―浦口まで列車ですが、貨車の中は暖房がきいて暑かった。天津駅について裸で出たぐらい、しかし、プラットホームは雪と氷でツルツルだった。浦口から船で揚子江を渡って南京へ、さらに安徽省無湖についたが、私は第一中隊配属で荻港という所でした。一期の教育検閲をすませぬうち、中隊長から呼び出され、希望したわけではないが、他二人とともに憲兵の試験を安慶で受けました。中隊へ帰り軽機関銃射手として教育を受けている時、大隊から三人の合格、私もその中に入っていました。

私は独立歩兵第二一大隊本部のある銅陵へ戻って、南京鐘山下士官候補憲兵学校の隣五台山の教育隊へ三月末入校しました。教育中は捕縄術で褒められたり、毎日遅くまで勉強していて、知らず知らずに居眠りしていて、どえらく吐られそうになったりで、だんだんと教育され、今でも修業時の記念写真を持っています。

修業と同時に九江憲兵隊本部に配属されてから、大治